



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	単回性トラウマティック・ストレス受傷者のresilience発現を促進・阻害する諸要因の研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	菊池, 浩光
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第11857号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59180
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Hiromitsu_Kikuchi_review.pdf, 審査の要旨



博士の専攻分野の名称 博士（教育学） 氏名 菊池浩光

學位論文名

災害、突然の事故、事件など想定外の出来事により安全感や信頼感が著しく覆される体験を人はどう受けとめるのか、それらの受傷者に対していかなる支援が求められるのか。本論文は、これについて、独自の臨床経験を有する著者が、事例研究と2つの調査的方法によって研究を行ったものである。

人類の歴史は、災害、戦争、事故、犯罪などの被害の繰り返しであるという一面をもつ。そこには、膨大な数に達する受傷者の深い悲しみと耐えがたい苦しみがある。それゆえに、人々の安寧な生活と心のケアを保障することが、今日における社会的課題となってきた。そうした、時代の新しい要請のなかで、本論文は、具体的には、単回性の心的外傷の受傷者の場合について、回復を促進する要因と阻害する要因とを探りその本質をあきらかにしたものである。

第1章は、わが国における心的外傷概念の受け止め方の歴史を論じている。なにゆえにわが国では社会の心的外傷への関心が薄かったのか、また、専門家の研究意識が希薄であったかについて、先行研究を詳細に検討して議論を行っている。古代から近世までの心的外傷に関する記録を丹念に辿り、心的外傷理論が導入された近代以降については、主に医家による研究史を独自の視点から総括している。その結果、わが国において心的外傷に対する関心や研究意識が低かった理由として4点が導きだされた。

第2章では、受傷者の生活と心理にかかわる書籍資料を用いて、従来、あまり論じられてこなかった心的外傷者が抱く生きづらさの解明に焦点を当てている。なぜ心的外傷が理解されにくく、それを伝達することが困難であり「わかってもらえなさ」や「わからなさ」を生じさせるのかを分析した。そして、当事者と社会との間の大きな裂け目が生きづらさ

を生み出すことを明らかにした。すなわち、語る側の 11 点に及ぶ要因、聴く側の 4 点の要因が導き出された。

第 3 章は、本論文の中心的位置を占める。著者の臨床事例から得られた、回復と阻害の諸要因の抽出に関する研究である。12 の事例研究の結果、回復の促進・阻害要因を分かち要素として、(1) 繋がり感は大きな安心感をもたらす、(2) 「日常生活場面」には力がある、(3) 一つの回復（阻害）要因が他の要因を凌駕する、(4) 二次的ストレスは大きな阻害要因になる、(5) 非力の段階から自力が発現する段階へと変化する、(6) 時間の経過が回復を包み込む、(7) 受傷者の個人的特性が影響する、という 7 点が明らかになった。

第 4 章は、臨床事例 10 名へのアンケート、および、その中の 6 例への調査的インタビューから得たデータについて質的研究を行ったものである。回復に役立った要因、回復を阻害した要因、体験して導かれた方策などを検討している。その結果、(1) 周囲の差し響きの力は強力である、(2) 受傷者は話たがっている、などの 7 要因が導かれた。

第 5 章の総合考察では、回復モデルと resilience、resilience 発現の条件、resilience 発現のための介入が論じられている。そして resilience に恃んで回復を促す回復モデルの医療実践は、モラル・トリートメントや心理エネルギー論を提示したジャネ（Janet, P.）の考え方にすでにみられていたことに言及し、心理療法は、心的外傷の受傷者にとって重要な役割をもつことを明らかにした。

本論文の意義は、第一に、実際には得がたい臨床経験による知見に加えて調査的方法によってトラウマティック・ストレス受傷者の resilience 発現を促進・阻害する諸要因を明らかにしたということにある。調査協力を得ることの困難に鑑みて、本研究はわが国では例をみない研究であるということができ評価に値する。また、第 1 章で論じられたわが国における心的外傷の受け止め方の歴史の著述は、本邦初の本格的な研究である。今後、長きにわたって参照されられると思われ、高く評価できる。

本論文はいくつかの点で評価できるものであるが、研究の対象である受傷者、調査協力者の重症度は必ずしも高くはなく、しかも、事例数には限りがある。問題の性質上、実際の制限は多々あるが、今後、対象を拡大してさらに検討することが望まれる。また、心的外傷理論が西洋の心理学であることを考えた場合に、わが国の独自の接近・支援についても検証される必要があると思われ、さらなる研究を期待する。

本論文をもって、わが国における resilience 発現を促進する接近法による心的外傷者支援を対象とした臨床心理学的研究の嚆矢とすることができ、今後、心的外傷に苦しむ人々への支援に大いに貢献すると評価できる。

よって著者は北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。